

九州クモの会会報（第1号）昭和53年1月

九州クモの会の発足にあたって

九州クモの会会長 吉倉 真

このたび九州に、九州クモの会ができましたことは、日頃クモを研究材料としている私たちにとっては、たいへんうれしいことです。この会によって、九州のクモ学の水準がさらに高まることを心からねがっております。

さてクモと言えば、一般の人はなにか気味悪いもの、こわいものとして近づきません。クモの巣はわずらわしいものと、事も無げに払いのけ、身近かな動物ではあるが、ほとんど関心をもっていないようです。

数年前、アラスカに行ったことがあります。アンカレジ、フェアバンクスなどで2週間、存分に北の自然に親しんだわけです。白樺の林があり、ヤナギランの花が咲き、コケモモ、ガンコウランが実をつけていて、長年、樺太にいた私には、たいへんつかしい思いをしました。しかし円網をはるクモは一匹もいませんでした。樺太から夏のころ、アカオニグモがエゾイチゴなどに、大きな円網を張ってせっせと虫を捕っているのに、アラスカではそんな光景が全然見られないのです。木イチゴの実を食べながら、淋しい思いをしました。M.ミラーの書いた「ベーリング海の露と人」(1936)という本の中にこんな話があります。アラスカのノームから、初めてアメリカ合衆国本土にきた14才のエスキモーの少女が、一番驚いたものは、ビルディングでも、通行人の多いことでも、列車でも、エレベーターでもなかった。それはある朝、宿の裏庭で見つけたクモの円網であった。彼女はそれが欲しかった。ぜひ持って帰りたいので一つ買って下さいと母親に頼んだということです。見たことのない人にあっては、まさに驚異的作品であったろうと思います。私たちは身近かに、いつも見てい

るものですから、そんな感動を覚えないのです。

少年少女の皆さんには、案外クモに興味をもっている人が多いようです。熊本では毎年、県で科学研究物展示会どいうのをやりますが、それには必ず二つや三つは児童、生徒のクモについての研究物があり、入賞しています。そんな若い人たちのクモ探求心をぜひ、もっと伸ばしてやりたいものと思います。

近頃はテレビでも、クモの世界の面白さをとりあげるようになり、数日前、ミズクモの巣の作りかたとか、タランチュラとベッコウバチとのたたかい、メダマクモが投網を使って虫を捕ることなど、萱鶴先生の説明入りで放映がありました。これもまたその時テレビで見たことですが、宇宙飛行士がオニグモを旅行に一緒に連れて行って、宇宙空間の無重力状態のところで網を張らせてみた。最初はかなり乱れていたが、とにかく造った（つまり網造りには重力はほとんど影響ないということが分かった）。

2度、3度と度重なるうちに、おしまいには地上で造るものと、ほとんど変わぬほど立派な円網を造るようになったとのことです。こんなことにも、クモが研究材料に使われているとは、ほんとに素晴らしいことだと思います。

クモの研究の面白さは、やってみればどんなクモにだって見つかります。家のまわりにいるオオヒメクモにも、ヒラタクモにも、ジグモにも。それから野外で、さまざまな生活をしているクモたちにも。それらのクモそれが、自然界の一員として、いろいろな役割をもって生きているのです。私たちはクモの生活を通して、自然をもっとよく学び、もっとよく知り、そして自然保護の必要なことを本当によく理解したいと思います。

この会では、そういうことをいつも頭においています。会員相互の親睦を深め、クモの研究もしますけれど、それと同時に、会員の皆さま方と一緒に、青少年のクモ探求心の芽を伸ばし、それに力を与え、また一般の人たちにも、クモについて正当な理解をもっていただくよう、啓蒙的な活動もやっていきたいと思っています。

あえてクモ学会と言わず、クモの会としたのも、そんな気持ちのあらわれでもあります。広く会員のみならず、一般の方々にも御協力を願いして、この会がますます発展するよう、発足にあたって一言挨拶を述べさせていただきました。

九州クモの会会則

1目的

本会は九州在住者を中心としたクモ愛好者の集いであり、九州のクモ学の水準を高めること、会員相互の親睦、交流を図ること、および愛好者の底辺を拡大することをその主な目的とする。

2活動

本会は上の目的を達成する為に次の活動を行なう。

①会誌の発行。

②例会の開催。（例会では採集観察会、講演会、研究発表会、その他の活動を行なう。）

3会員

①クモに関心のある者なら誰でも自由に入会できる。

②会員は本会の行なう全ての活動に参加することができる。また会誌の配布を受け、これに投稿することができる。

③会費は原則として前納とし、金額については別にこれを定める。

④会費滞納1年の場合は会誌の発送を保留し、2年に渡る時は自然退会とみなす。滞納会費は退会時に精算する。

4運営

本会の活動を円滑に行なう為、本部、運営委員会、編集局、事務局を置き、役員として会長（1名）、会計（1名）、監査（若干名）、運営委員（数名）、編集委員長（1名）を置く。役員は総て全会員による選挙によって選ばれる。任期は2年とし再任は妨げない。兼任を認める。

- ①会長は本会の代表であり、本部の最高責任者である。
- ②本部は運営委員会、編集局、事務局の連絡、統括の場とする。設置場所は別に定める。
- ③運営委員会は運営委員によって構成され、本会の目的の達成に必要な諸活動の企画、実施を合議の上行なう。また会誌の発行が順調に行なわれるよう編集局に協力する。
- ④編集局は編集委員長及び編集委員長によって委嘱された若干名の編集委員によって構成され、原則として年2回以上会誌を発行するものとする。また投稿原稿の受け入れ口とする。設置場所は別に定める。
- ⑤会計は財政の保管、運用に関して総ての責任を負う。なお会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。
- ⑥事務局は会費の受け入れ、会誌の発送を行なう所とする。会計をもってその長とし、会計によって委託された若干名の会員によって構成される。
- ⑦監査は会の運営が正常に行なわれるよう運営委員会を監督し、助言を与える。また財政を年1回以上監査するものとする。

5. 総会

- ①総会は例会等の機会を利用して隨時開くものとするが、最低2年に1度は開かねばならない。
- ②総会は本会則の改正及び諸般審議事項（役員選出を除く）を総会出席会員の2/3以上の賛成をもって決する。

6. 施行

本会則は昭和52年11月27日をもって施行する。

九州クモの会会則

1目的

本会は九州在住者を中心としたクモ愛好者の集いであり、九州のクモ学の水準を高めること、会員相互の親睦、交流を図ること、および愛好者の底辺を拡大することをその主な目的とする。

2活動

本会は上の目的を達成する為に次の活動を行なう。

①会誌の発行。

②例会の開催。（例会では採集観察会、講演会、研究発表会、その他の活動を行なう。）

3会員

①クモに関心のある者なら誰でも自由に入会できる。

②会員は本会の行なう全ての活動に参加することができる。また会誌の配布を受け、これに投稿することができる。

③会費は原則として前納とし、金額については別にこれを定める。

④会費滞納1年の場合は会誌の発送を保留し、2年に渡る時は自然退会とみなす。滞納会費は退会時に精算する。

4運営

本会の活動を円滑に行なう為、本部、運営委員会、編集局、事務局を置き、役員として会長（1名）、会計（1名）、監査（若干名）、運営委員（数名）、編集委員長（1名）を置く。役員は総て全会員による選挙によって選ばれる。任期は2年とし再任は妨げない兼任を認める。

- ①会長は本会の代表であり、本部の最高責任者である。
- ②本部は運営委員会、編集局、事務局の連絡、統括の場とする。設置場所は別に定める。
- ③運営委員会は運営委員によって構成され、本会の目的の達成に必要な諸活動の企画、実施を議論の上行なう。また会誌の発行が順調に行なわれるよう編集局に協力する。
- ④編集局は編集委員長及び編集委員長によって委嘱された若干名の編集委員によって構成され、原則として年2回以上会誌を発行するものとする。また投稿原稿の受け入れ口とする。設置場所は別に定める。
- ⑤会計は財政の保管、運用に関して総ての責任を負う。なお会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。
- ⑥事務局は会費の受け入れ、会誌の発送を行なう所とする。会計をもってその長とし、会計によって委託された若干名の会員によって構成される。
- ⑦監査は会の運営が正常に行なわれるよう運営委員会を監督し、助言を与える。また財政を年1回以上監査するものとする。

5.総会

- ①総会は例会等の機会を利用して隨時開くものとするが、最低2年に1度は開かねばならない。
- ②総会は本会則の改正及び諸般審議事項（役員選出を除く）を総会出席会員の $\frac{2}{3}$ 以上の賛成をもって決する。

6.施行

本会則は昭和52年11月27日をもって施行する。

第10回東亞蜘蛛学会熊本大会の開催について

甲守 崇

昨年8月に東京において第9回東亞蜘蛛学会の大会が行われましたが、当大会におきまして本年第10回大会—昭和53年8月19日(土)、20日(日)—を熊本で開催することが提案され、本県がこれを引き受けることになりました。

県内の会員は少人数ですが何かと意識ある大会にもっていきたいと思います。幸い、この大会を前にして九州クモの会が発足致しましたことを大変心強く思っております。

会員の皆様にはいろいろ御協力をしていただくことになりますが、その節はよろしくお願い申し上げます。

大会の準備として、宿泊所と会場が問題になりますが、これまでの経過について簡単に報告いたします。

宿泊所は国家公務員共済会館(五峰閣)、会場を今年3月に開館致します熊本市立博物館を予定して居ります。两者共熊本城内に位置し、中心街も近く便利の良い所です。又、大会の特別講演は九州クモの会々長の吉倉真先生にしていただくことが予定されています。大会2日目の午後は希望者によるキムラグモを中心とした採集、観察会を行いたいと思いますが如何なものでしょうか。

大会についての御意見、御希望がありましたら早目に当方へ連絡いただければ幸いだと思います。まだ準備委員会も発足いたしておりませんが、早急に本格的な準備に入りたいと存じます。

入会案内

☆ 臨時会費 1000円(52年度分) <ただし高校生以下は500円>

昭和53年3月31日までの短い期間の会費ですが、会の財政確立の為よろしく御協力御願いします。(53年度分については追って御報せします。)

☆ 会誌(研究発表誌)を年2回、会報(ニュース的なもの)を年数回発行予定です。

(52年度は会報のみ)

☆ 事務所(会費はここに御送り下さい。)

〒812 福岡市東区箱崎 九州大学農学部昆虫学教室内

九州クモの会 振替番号・・・福岡 37343

九州クモの会会報 第1号

印刷日 1978年1月6日

発行日 1978年1月7日

編集者 大熊 千代子

発行者 吉倉 真

発行所 九州クモの会

九州クモの会会報（第2号）

昭和53年3月

九州クモの会の発足を祝す

八木沼 健夫

九州のクモの会の発足を心からお喜び申し上げます。九州にこのような会の出来ることを早くから待ち望んでいただけに本当に嬉しく思います。

ペーゼンベルク・ストランドの「日本のクモ」の著に出ているクモの大部分は九州産で、九州はいわば日本のクモ学の発祥地のような所であり、また九州はキムラグモ・ムチサソリ・オオスミコガネグモなど特異なものを産する地域でもあります。さらにみなさんが存知のごとくクモ学者がたくさん居られ、分類・生態・形態・発生・生理などの専門家のそろつていることも大きな特色でありまして、文献の極めて豊富な大学を持つている地域において、これらの人たちで組織されるこの会に大へん力強いものを感じます。

研究者がふえるとともに各地に同好会ができるることは大へんよろこばしいことで、各地域における研究の蓄積はやがて日本のクモ学の力ともなるものです。しかし各地の同好会も同じ悩みを持つていると思われますが、会が出来ると機関誌が必要になつて来ます。これには相当の費用がかかり、その地域のメンバーのみの負担ではとてもまかない切れません。結局全国的に呼びかけて会員を集めることになるのはやむを得ないことと思います。将来各地に何十という同好会が出来るような場合はともかく、今のところ致もそう多くはないので、他の同好会と同様にみなさんのご協力をお願いします。

そこで私の九州クモの会に望みたいことを二・三述べさせていただきます。

ひとつは、九州は九州としての地域の特色を持たせ、他の地方ではできないような研究をやっていただきたいということです。各地の同好会がすべて同じような学会の形ではありません意味がなく、その研究内容において、ねらいにおいて地域性を生かした独特のものを持たれるよう望みます。

さらに研究の面でお願いがあります。ベーゼンベルク・ストラントの記載に用いられた九州のクモで、未だに正体不明や疑問のものがあります。東京の松本誠治氏がはるばる出かけて調査されましたし、小野辰嗣氏や私もフランクフルトで九州産のタイプ標本をいくつかは見ていますが、これらの究明はぜひ九州の人々でやっていただきたいと思っています。日本のファウナや分類の研究に大いにプラスされることでしょう。

同時に趣旨にも書かれているように、底辺の拡大により多くの後継者を養成していただきたいものです。このことはどこでもできるというわけのものではなく、すぐれた指導者の多数居られる九州では可能なことで、各位が研究の歩みを進められるとともに、多くの学者を養っていただきたいと思います。私もみなさんからいろいろ教えていただくとともに、及ばずながら有形無形のご協力をしたいと考えています。将来のかがやかしいご発展を祈ります。

(53. 2. 16.)

会員名簿(1978年3月)

秋月良和	891-47	鹿児島県大島郡徳之島町花篠 52 TEL 09978-4-0058 (東天城中)
馬場武彦	812	福岡市博多区吉塚 1-3-16 新銅荘 1号 TEL 092-611-8019
別府義昭	892	鹿児島市吉野町 1861-36
干木良芳範	904-21	沖縄市宮里 363
出来律子	891-93	鹿児島県大島郡与論町茶花 2384
市場利哉	840	佐賀市天祐 2 丁目 6 番 1 号 佐賀県立佐賀北高校 TEL 0952-26-3211
入江照雄	861-05	熊本県山鹿市小原熊本県立教育センター
石野田辰夫	880-03	宮崎県宮崎郡佐土原町新城
岩本応	850	長崎県西彼杵郡香焼町 1060 番地香焼町役場
浜田竜一	907	沖縄県石垣市登野城 911
原田正和	812	福岡市東区箱崎九州大学理学部生物学教室 TEL 092-641-1101 内線 4169
神崎信生	871	大分県中津市大字野依 537
木下育美	836	福岡県大牟田市千録 602 の 2
木庭奏	861-35	熊本県山鹿市南島 826 の 1 TEL 09684-4-6818
甲守崇	860	熊本市壱川 2 丁目 10 の 10 TEL 0963-22-1561
熊田憲一	221	横浜市神奈川区片倉町 199
松山紘一	885	宮崎県都城市妻ヶ丘 27 街区 15 都城泉ヶ丘高等学校 TEL 0986-23-0223
水沢正明	940-11	新潟県長岡市曲新町 3 丁目 13 番 1 号 新潟県立長岡農業高等学校 TEL 0258-33-4701
村上成功	869-41	熊本県八代郡鏡町上鏡 233
西川喜朗	565	大阪府吹田市千里丘上 8-18
野田 泉	890	鹿児島市永吉町 10395 TEL 0992-54-7843
野田和之	862	熊本市健軍町 2188 の 2 TEL 0963-81-3362
大熊千代子	812	福岡市東区箱崎九州大学農学部昆虫学教室 TEL 092-641-1101 内線 4323
小野勇一	812	福岡市東区箱崎九州大学理学部生態学教室 TEL 092-641-1101 内線 4242
大塙 熊	862	熊本市健軍町 2169

大 塚 龍 也	865	熊本県玉名市立願寺 1,368-4
下 謙 名 松 栄	901-21	沖縄県浦添市勢理客 103
新 海 栄 一	185	東京都国分寺市本郷1丁目6の6
田 上 重 慶	863-12	熊本県天草郡河浦町河浦 5021の1
上 原 明	812	福岡市東区箱崎原田 5丁目1組 吉岡博莊
山 口 鉄 男	856	長崎県大村市武部郷小佐古 419-8
		TEL 09575-2-6263
吉 倉 真	860	熊本市清水町高平 151 TEL 0963-55-2097

会 誌 投 稿 規 定

1. 寄稿者は会員に限る。
2. 原稿の内容は、蝶形類に関するものなら、解説・記録等なんでもよい。ただし、エッセイ等は著者の了解があれば、「会報」に掲載することもある。
3. 20×20字原稿用紙に、1マス1字で書くこと。ただし、欧文は2マス3字とする。(少々の訂正は可)
4. 学名は、赤でアンダーラインを引くこと。
5. 図は墨入れをし、そのまま印刷できるよう、原寸であること。
6. 原稿は図表を含め、出来上がり6頁以内とする。それ以上の長さの原稿については、分冊するか、もしくは超過分の費用を個人負担とする。
7. 写真版等特殊技術を要する印刷費用は個人負担とする。
8. 希望があれば、個人負担で別刷を作製します。希望者はその旨を必要部数・表紙の要・不要を明記して原稿に添えて申し出て下さい。

会 報 投 稿 規 定

速報的記事・エッセイ・自己紹介・ニュース・日頃の所感・会に対する注文・採集会の案内等何でも結構です。また研究の疑問を寄せあい、それについてみんなで考えるなど、情報交換の場としても役立てていただきたく思います。原稿は原則として約2,000字以内とします。どうか詳しい気持で投稿お願い致します。

原 稿 の 送 り 先

〒812 福岡市東区箱崎

九州大学農学部昆虫学教室内九州クモの会

クモをつかむ話

原田正和

はじめて、大熊さんから自己紹介的な記事を書いて欲しいと言われ、つい引き受けてしまつて、書く羽目に陥りました。まず私がどうして九州クモの会に入る事になつたかと言いますと、以前から洞穴生物に興味を持つていて、いろいろな洞穴で採集しますと、その中にクモが相当採れます。ところがそれらの種名がわからないし、又洞穴のクモはおもしろそうだと言うのでクモ学会に入つたわけです。（もつとも、学会に入つたからと言つて種名がわかつたわけではなく、標本は今だにピンの中で眠つております。）その後、しばらくして、九州クモの会を作ると言う案内を頂いたので、「九州のクモ学の水準を高める」自信は全くありませんが、「会員相互の親睦、交流を図る」事位はできそうだと言うので入会しました。何とか除名だけは免れるべく努力しようと。。。。。

私と初対面の人は、外見から見て、非常にまじめな人らしいと感じられるそうですが、本当は冗談や洒落が好きな不真面目な人間であります。寿司とモーツアルトも非常に好んでおります。話を音楽の方に移しますと、音楽は全般的に何でも好きで、クラシック、ジャズから邦楽、演歌まで聴いています。クラシックでは、あるものを聴き出すと集中する傾向があり、初めは交響曲を中心があつたのが、ピアノ曲からモーツアルトの曲へと変わって来ています。昔は宗教曲は全く聞く気もしなかつたのに最近では年のせいか、モーツアルトのレクイエムや、ハイドンのオラトリオ「天地創造」等を聞いて感動したりしています。好きな作曲家はモーツアルト、同質性を感じさせるのがショパン、どうも好きになれないのがマーラー。最近あるきっかけでオペラを聴いて、これから当分はオペラに凝りそうな予感がしています。誠にとりとめないクモをつかむ様な話で失礼。

本号では原田さんの自己紹介を載せました。これからも自己紹介を載せていいたいと思います。気軽に原稿を御寄せ下さい。お互い、滅多に逢えませんので、会報を通じて会員相互の親睦を計りたいと思います

事務局だより

会誌第1号を東亜蜘蛛学会第10回大会までに完成させたいと思います。については奮つて原稿をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。6月末日着の原稿まで創刊号に掲載する予定です。また会誌の名称が未定ですので、いい名前がありましたらお報せ下さい。なお投稿規定はP. 4に載せてあります。

53年度以降の会費を年額2000円（高校生以下は1000円）とします。52年度分会費を頂いたばかりですが、前納となつておりますので、なるべく早く御送り下さい。これを機会に入会される方も歓迎いたします。また寄付も歓迎いたします。

東京クモ談話会・新潟蜘蛛研究同好会・三重クモ談話会等に九州クモの会発足のあいさつを出し、会誌の交換を求めていましたところ、各々から早々と会誌の御寄贈をうけました。事務局で保管していますので、福岡に出ておいでの方には、立寄つてお読み下さい。

寄付受領

石野田辰夫 1,000円 甲守 崇 3,000円 木庭 奏 1,000円

吉倉 真 第1回会合会場費

（敬称略）

九州クモの会会報 第2号

印刷日 1978年2月23日

発行日 1978年2月24日

編集者 大熊 千代子

発行者 吉倉 真

発行所 九州クモの会

九州クモの会会報（第3号） 昭和53年6月

東亞蜘蛛学会第10回大会総会について

先に九州クモの会会報（第1号）に於いて、本大会について、御案内致しましたが、重ねて御案内と御協力を御願い申し上げます。

九州クモの会発足後、準備委員会を開き、会場、宿泊所、会費等種々打合わせを重ね検討の結果、大会、総会要項を決定し、申し込み用紙を御手許に御届け致した次第です。不十分な点、その他御気付きの点がありましたら、お知らせいただければ幸いです。本大会が、東京大阪等での開催と異なり、辺地である為、どれほど出席者があるかが心配です。大会を成功させる為に是非九州在住の会員の方々に全員出席していただければ念じております。

大会についての準備もこれからだと思いますので、御近くの方々には今後共御協力を特にお願い申し上げます。

（大会準備委員会）

クモの会に寄せて

菊屋 奈良義（大分）

話は随分と古い。若い方々に失笑を買うかも知れないが、昭和20年8月23日の事である。

当時、大分陸軍少年飛行兵学校に在籍したが、23日午前2時に非常ラバで叫き起こされた。寝ぼけ少年兵が、校庭に集合して、整列が終り点呼が済み、区隊長に報告が終っても、教官達に全くキビシイ動きがない。

指揮刀を手にした学校長が、壇上に立つや、「諸君、日本は敗けた。」と怒鳴ったま

ま、沈黙を続けた。はっきりと聞こえたのだが予想もしていなかった事なので、理解できるまでに3～4分かかったように記憶している。

全員の偲び泣きが洩れ、区隊付き下士官に至っては、座り込んで地面を叩き乍ら泣きはじめた。

8月15日が終戦の日だったと言うことは、あとで区隊長から知らされ、14才の少年達は、まだ日本陸軍の保秘力に感銘を受けたほどだった。

そして、その日のうちに武装解除、ハンゴーと毛布と軍服だけで、塩たれた訓練用戦斗帽を被り、生家に引き揚げた。心細さと、口惜しさと、そして空腹が重なり、我が家家の玄関にたどり着いた時の複雑な気持は、いまだにうまく表現できない。

親父も海軍高射砲隊から、まだ復員していなかった訳だが、何しろ我が家には全く見知らぬ人々が住みついていて、此の近所の人は全部山奥に逃げていると云う。

少年の心に拡がった口惜しさが故郷の風景をにじませた。

軒下のヤツデの植込みを、ふと懐かしんだ時、実に見事な、きらめきが眼に飛びこんだ。コガネグモのあの美しさと、あのしづけさを、私は今でも忘れることが出来ないでいる。東亜に入会させていただいた折も、八木沼先生に私信として聞いていただいたのだが、恥ずかしい事に、私がクモに魅せられた瞬間だと思う。

それ以来勉強として取組むよりも、仕事の合い間にクモ達の美しさを眺めさせてもらって、楽しませてもらった、と言う「おつき合い」である。現在では、変なキッカケから、建築環境内の有害動物と取組んでいるものの、大分県内で崩落する崖地や、道路ワキの「キムラグモ」の巣を、やゝゆるやかな傾斜地や、自然林に移植？することで、変なクモ保護を続けている。仕事の関係で広く走り廻るので旅を楽しむ一つの方法であるとも言える。娘は「ささやかなマスターべイションだ」と笑っているが、この年で、変な楽しみの一つ位はあって良いのではないか？と思いつぶやいている傾向もある。

何しろ、九州クモの会が出来てこれから若い研究者の方々に、オフサン風の年頃としては、蔭から地方情報や、採集案内ぐらいのことしか協力出来ないが、大分に来られたら、是非立寄ってもらいたいものと、壳り込んだ次第。

W A N T E D

このクモにピンと来たら本会捜査課へ

BÖESENBERGとSTRANDがJapanische Spinnen (1906) に記載して以来、まったく発見されていないものや、極めてまれにしか見つからないもののがかなりある。これらすべてを明らかにすることは困難であり、記載文のみからモンタージュ写真を作ることもできないので、特徴の比較的はっきりしたもののいくつかを選んで、みなさんに発見のご協力をお願いする。発見された方



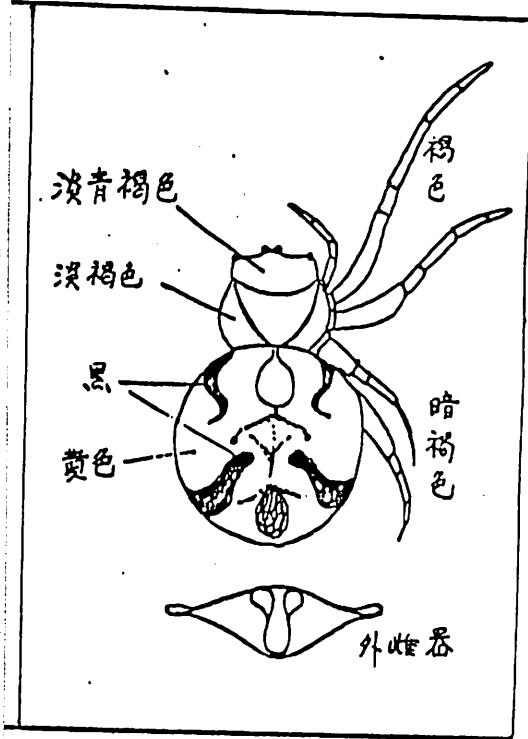
カニグモ科の Cupa typica タルグモ

身長約 5 mm, 腹はずんぐりしており、
フクログモ科の感じがある。眼に特徴
がある。女性。（佐賀・湯の原産…
原文はユノハマ山）

(第 1 回 指 名 手 配)

はぜひ逮捕の上、九州クモの会なり東亜クモ学会に身柄を送って下さい。

今回掲げる2種はBÖS...STR. 氏の原図を模写したものであるが、特徴ははっきりしており、また原図が正確であることはフランクフルトにあるゼンケンベルク博物館のタイプ標本で確かめた。...、



コガネグモ科の *Paraplectana japonica*
トラマルグモ。身長小柄で 2 mm ぐらい。腹部の斑紋が特徴的。女性。 (佐賀産)

(第1回担当 八木沼健夫)

対馬採集旅行記

5月22、23、24日、はじめて対馬（三根村）に行きました。福岡から飛行機で約30分、こんなに身近かな島であることは知りませんでした。目的は、リュウキュウアシナガグモ (*Acta arach*, Vol 27; 27-32) が対馬にも居ることがわかり、生態を見たいと思ったためです。発見者横原寛氏（九大農昆）に、くわしい場所をならつていたので、その日のうちに現場（大星山・北五郎林道）にたどりつき、12:30~18:00の間、充分に観察や採集をしました。リュウキュウアシナガグモは、この林道添いの立枯れのヨモギの古枝に、小さな、独特の網を張って、網を初夏の太陽にさらして、いくらでもいました。翌日の木坂神社でも見かけたし、対馬全島に、極く普通に生息しているのではないかと推察されました。

宿は三根村の大橋旅館。予約なしの飛び込みでしたが、全々いやな顔をされずにOK。おばさんに親切にもてなしてもらいました。1泊4,000円、3食付。ただし美食を期待される方には不向。

翌日は、宿のおじさんにすゝめられて、木坂神社に行き、9:00~14:00を野鳥の森で過し、その後は採集しながら三根村まで。三根村着17:00。

翌半日は、三根村の水田周辺で採集。午後の飛行機で福岡に戻りました。

経費一 福岡一対馬往復（全日空）10,800円、空港一三根村往復（バス）

750×2、三根村一北五郎林道入口往復（タクシー）970×2、

三根村一木坂神社片道（タクシー）800、宿泊費2泊4,000×2

合計 23,040円

観察や採集種の詳細は、本会々誌1号に投稿の予定です。

福岡・大熊 千代子

事務局だより

皆様にはお変りございませんか。

会誌第3号をお届けします。東亜蜘蛛学会第10回大会も近まりつつあります。皆様の御参加、御協力を願いいたします。

自己紹介などの原稿をお願いいたしておりますが、今回は大分の菊屋奈良義さんからお寄せいただきました。どうも有難うございました。また今回は、八木沼先生から、九州で採集可能と思われるナゾのクモを指名手配していただきました。これはしばらく速報の予定です。指名手配種を九州クモの会では是非明らかにしていきたいと思います。また会員の皆様からも、このような原稿が寄せられることを期待いたします。

三重クモ談話会から“しのびぐも”第5号が送られてきました。同会の御発展をおよろこび申し上げます。九州クモの会も、頑張って会誌1号をはやく出したいと思います。皆様の原稿をお待ちいたしております。

九州クモの会会報 第3号

印刷日 1978年6月20日

発行日 1978年6月20日

編集者 大熊千代子・馬場武彦

発行者 吉倉 真

発行所 九州クモの会

与論島だより

鹿児島・出来律子

皆様、こんにちは。私が、学会に入会してから、早5年にもなりますが、恥ずかしい話、活動の実績は皆無に等しく、ただ頭の中ばかりでクモのことを見ている次第です。

さて、私が主人の転勤で与論島にやって来たのは昨年の4月ですが、船上で初めて眺めた島の印象は、今だに忘ることはできません。島には高い山はなく、のっぺらとまるで皿をかぶせたような形で、津波でもくれば瞬く間に海につかってしまいそうな心細さを感じたものです。しかし、徐々に島に近づくうちに、海のすばらしさに声を上げてしまいました。コバルトブルーの海を見たのは、これが初めてだったからです。その美しさといったら、筆無精の私には表現できませんので、皆様、一度来島されるとよいかと思います。そのためにもという訳ではありませんが、島のことを少し紹介したいと思います。

与論島は、周囲23km、面積20.8km²の小島で、晴れた日には、すぐ近くに沖縄の島々がくっきりとつながめられます。沿岸は基礎が発達しており、年々、観光地として脚光を浴び、夏期には島の人口よりも観光客の数が上まわるということです。そのため、狭い島内には、ホテルや旅館、民宿などが連ち並び、まさに観光ブームが蔓延しています。生活の基盤をなす水についてですが、川が全くありませんので、ほとんど地下水にたよっており、島の性質上、石灰を多量に含む硬水であります。我が家では、飲料水は、軟水器を使用して、石灰を除いたものを用いていますが、それでも濾しきれない場合があるようです。

ところで、肝心の島の自然についてですが、植物相など、やはり本土とはずいぶん異なるのが一目でわかります。亜熱帯独特のものが多くみられ、樹木など、本土に比すと低木が多いようで、ソテツ、アダン、パパイア、ガジュマルなどが、ごく普通に自生しているようです。ハイビスカ

スなどは、一年中といってよい程花を咲かせており、さすがに南国を感じさせます。これならきっと動物相もおもしろいものがあるにちがいない、といつも気をつけているのですが、今のところ、この平凡な頭の中には、子供並みの知識しか入りきらないようで、我が家の大井を数匹のヤモリが、チャッチャッと鳴きながらはいざり回るのを見て喜んでいる次第です。庭に出れば、大きな巻貝の殻を発見して、これは一体何んだとにらみつけていると、主人に「バカ！ それはアフリカマイマイの殻だ。」なんて言われ、大事に保存しようかと持っていた殻に八つ当たりしたこともありました。アフリカマイマイといえば、ここは昨年、広東住血吸虫のうわさが流れ、それ以来、私は生野菜を丹念に洗うことにしています。

また、ここは、ショウもおもしろいのがいて、昨年などは、5月～6月にかけて、オオゴマダラが、数多く飛びかうのを見ることができました。成虫も美しいのですが、私は、特にその蛹の金色の輝きに酔いしれる思ひがしました。ところが、不思議に今年は、オオゴマダラの姿をあまり見かけないので、残念に思ってるところです。

さて、クモについてですが、今のところ、私は、正確に調べていませんので、何ともいえません。けれども、いろいろと見たこと、感じたことなどを楽な気持ちで述べようと思います。まず、島内いたるところ、チブサトゲグモの多いことには、驚きです。色彩変異が多く、我が庭のハイビスカスの枝を土台に、網を張っていることしばしば。また、オオジョロウグモも見られ、最初目にした時は、うれしくって仕方なく、しばらくの間庭で飼っていました。ところが、近所の子供たちが、この大きなクモ君に石を投げつけてくれるので、困りはて、結局、逃がすことになりました。時々、1歳8ヶ月になる息子を散歩に連れ出し、なるべく自然にふれようとしますが、ちょうどそんな折、まだコガネグモをみないこの島に、ナガコガネグモが数多く分布しているのがわかりました。他に目に付いたクモといえば、アシダカグモ、ハナグモ、スマミグモ、ヘエトリ科の類などです。以上、観察といえない私のクモ観で申し訳ないのですが、現在、こういう感じでクモと親しんでいるところです。時間があれば、クモのリスト作りやチブサトゲグモの生活など観察してみたいなどと思っていますが、家事と育児に追われ、なかなか思うようにいかないところです。いつかは、自分の時間を持つてなるようになるというささやかな希望を胸にいだきながら、名前だけでもクモの会に置かせてもらっている状態です。

とりとめのない文章で大変失礼しましたが、与論島におこしの節は、どうぞお立ち寄り下さい。

ネコハエトリグモとカラスハエトリグモ

福岡・吉田裕之

ネコハエトリグモとカラスハエトリグモについて次のような興味ある事実が観察された。

1. 今年4月から始めたネコハエトリグモの個体調査過程において、ネコハエトリグモの亜成体、もしくは成体がいた巣を、数日後、カラスハエトリグモが利用していたし、まれに逆の現象もあった。
2. 6月下旬に、九大構内にあるマサキから、カラスハエトリグモ雌成体が守っていた巣を採集し、中を調べた結果、1つの卵塊を包んだ卵のうと、すでにふ化し、1令幼生のいる卵のうとが存在した。ところが、2卵のうのうち、卵塊のほうはカラスハエトリグモであったが、1令幼生はネコハエトリグモであることが、両者がそれぞれ2令に脱皮した時点で判明した（1令幼生では形態形成一特に眼一が不完全であり、種の判別は困難）。
3. 他のカラスハエトリグモ雌成体がいた巣を2つ採集した結果、それぞれ中に2個の卵塊が別々に糸で包まれて存在した。これら1巣内の2卵塊はふ化時期が異なり、明らかに違う日に産卵されていたことを示した。

以上の観察結果のうち、2の現象は、卵期における両種の発育速度が不明であり、どちらの種が先に産卵したのか断定できないものの、ネコハエトリグモが先に産卵をしていたと推測するのが頗当であろう。また1の観察結果からも、2のような現象はおこりうるとおもわれる。こういった他種の巣、あるいは同種内の他個体の巣を利用するという現象は、ハエトリグモ科以外のクモにも知られてい、また2のメカニズムも、ある程度わかっているのも多い。しかしながら、今回のこの現象について、競争による置きかわりなのか、あるいは、先住者が死亡または巣を放棄した後に、残された巣を利用しただけなのか不明である。3の観察結果について、カラスハエトリグモは、はじめの卵塊の仔クモが分散する前に、連続的に産卵するとも考えられるが、2の結果から、果して2つの卵塊は兄弟なのか疑問となる。すなわち、種内における親のおきかわりが行なわれているのではないかと考えられるからである。

以上のように、それぞれの観察結果についてそのメカニズムは今回何らわからず、考察も不十分である。今後、こういった点も少しずつ明らかにしていこうと考えている。

九州クモの会総会

東亞蜘蛛学会第10回大会第1日、昼食後の休憩時間をとって、九州クモの会の総会を開きました。

開会予定時間の12時50分を大きく過ぎた1時5分から、大会場横の1階ロビーの一隅で、大会出席の九州クモの会会員16名が集合しました。

司会者選出の時間も惜しくなり、言い出し屁の木庭が司会者となって開会。吉倉前会長からの挨拶の後、大熊さんから経過報告（会報1、2号の発行、会誌1号発行、会誌名をヘブタテラとしたこと）と1977年度の会計報告があり、監査報告（木庭）の後、決算報告の承認。次に、今後の会の活動について（会報、会誌、採集会等）の意見聴取に移りました。

会報については、出されば中上質紙で発行して欲しいという事でしたが、予算の都合で現在はザラ紙で印刷し、会誌だけは、上質紙でという事で落ち付き、採集会については、会員が九州全域に広がっているので、会員が集まって採集会をおこなうということは仲々むづかしいので、ある期日を決め、その日に一斉に自分の家の回りなどを採集し、それを報告し合ったら九州全域の調査が出るのではないかという意見が、松本さんから提案され、その方法もおもしろいのでやってみようということになりました。

続いて役員選挙に移り、候補者の推薦をお願いしましたが、初めてお会いする人もあり、どなたが適当かこの場ではなかなか決めかねないので腹案はないかという意見が出ました。

会長は、吉倉前会長に再度会長をお願いすること、会計も前年度会計をしてもらった大熊さんにお願いすることまで決定したところで残り5分。他の編集委員長、運営委員、監査については、後日会長から沖縄、宮崎、福岡など、地方の適当な方に依頼があるので、後日その方を承認していただくという提案を了承していただき、無事総会を終りました。

もっと時間をとって十分な意見を聞かねばなりませんでしたが、何分僅かの機会をとらえての総会でしたので、その点了承ください。会についての意見は、どうぞ事務局へ（九州大学、大熊さんの所へ）申し出ください。

(木庭)

※ 次の役員選挙は、2年後になります。

東亞蜘蛛学会熊本大会終わる!!

東亞蜘蛛学会第10回大会が8月19・20日に熊本で開かれた。関係者の心配をよそに、約60名の参加者が水前寺共済会館に集まつた。会場は水前寺公園に近く、立ち寄られた方も多かったようである。

吉倉会長の挨拶で始まった大会は、熱心な講演・討論の内に進んだ。(講演の熱心さたるや、時報係をしばしば悩ませるほどであった。) 昼休みには九州クモの会の総会が行なわれ、役員人事と今後の活動方針について意見が交わされた。午後は学会総会で幕を開けたが、その後で大分の菊屋氏がキムラグモの保護を訴えるなど、例年ない活気を呈した。第1日の講演は韓国の白甲鑄先生の特別講演で終り、いよいよ待ちに待った(?)懇親会である。熊本という土地柄もあって、焼酎も顔を出したが、ここでは九州勢よりはむしろK.K氏を中心とする東京勢の健闘が目立った。翌日は9時から吉倉会長の特別講演があり、一部の二日酔いの面々も朝から顔を連ねた。

会誌Heptathelaの創刊号の発行も大会までに間に合い、参加者の間にも好評を博し(?)九州クモ界のレベルの高さを全国に示した。(??)。この為か、会期中の入会希望者も約10名を数え、会計の大熊女史は終始ニコニコであった。大会は成功の内に幕を閉じたが、これを機会にますます結束を固め、九州クモの会を盛り上げていかねばならない。(馬場)

1977年度決算(1977年11月27日より1978年3月31日まで)

摘要	収入	支出	残高	備考
会費、カンバ	70,000			
会報1、2印刷費		13,500		*1号 200部
同上発送費		4,930		7,000円
挨拶状ゼロックス		220		*2号 200部
雑費(ゴム印)		1,250	50,100	6,500円

上記の通り相違ありません。会計 大熊 千代子

監査済 昭和53年8月18日

監査 木庭 奏

事務局だより

涼しくなりました。皆様お元気のことと存じます。熊本大会のあと、事務局は少々遅けてしまつて、会報4号の発行が遅れてしまったことをおわびいたします。（本当は、馬場は試験勉強、大熊は標本同定に追いまくられました。）

8月は九州クモの会に沢山の入会がありました。10月1日現在会員数は54名です。内訳は九州35（福岡8、佐賀1、長崎2、熊本9、大分2、宮崎4、鹿児島5、沖縄・石垣4）、関東10、北陸1、中部1、近畿7。

近く会員名簿を作成します。住所変更のある方、電話番号を入れたい方は事務局までお報せ下さい。（11月2日〆切）

信任投票のハガキを封入しています。よろしくお願ひいたします。

寄付受領

松山紘一 1,000円、西川喜朗 1,000円、築地満男 2,000円、八木沼健夫 5,000円、吉倉真 10,000円、木庭奏 2,000円、大熊 5,000円、入江照雄 1,350円。

九州クモの会会報 第4号

印刷日	1978年10月20日
発行日	1978年10月20日
編集者	大熊千代子・馬場武彦
発行者	吉倉真
発行所	九州クモの会
印刷所	ふじよし印刷

九州クモの会会報（第5号） 昭和54年4月

背振山系のクモ（佐賀県）

木庭 奏・大熊 千代子

「日本の蜘蛛 Japanische Spinnen」に記載されたクモの主な採集地である佐賀県のクモ相は、調査があまり進んでいず、近年松本氏ら東京蜘蛛談話会のメンバーで、湯の原を中心に進められているようである。

筆者らも近隣県にいながら、そこまで手が伸びずにいたのだが、何とか調査を開始しようということで、去る1978年11月23日、予備調査として、僅か3ヶ所であるが、次の地点を採集してみた。

- ①鳥栖市立石・石谷山登山路（標高100m～200m） ②佐賀市中原町七曲峠
(標高540m～570m) ③東背振村松隈・松隈林道（標高480m～540m）

当日は、快晴で気温も高く、採集に絶好の日よりであった。しかし、時季的にみてクモ相は幼生が多いだろうということが予想されたが、ピーテングを主としてとり入れて採集した。

その結果、採集されたクモ類は11種34種であった。採集されたクモ類目録は、後日、会報にまとめる予定であるが、今年の調査の参考にするために、簡単に和名を記録しておく。

（ウズグモ科）オオギグモ1♂、ウズグモsp. 3幼生、（ヒメグモ科）ホシミドリヒメグモ1幼生、ヒシガタヒメグモ1幼生、サヤヒメグモ1♀、カニミジングモ1♂、ヒメグモ1♀、ムナボシヒメグモ? 1幼生 （コサラグモ科）マダラナンキングモ1♀

♀ (センショグモ科) ハラビロセンショウグモ 1 幼生 (コガネグモ科) ハツリグモ 1 ♂, ショウジョウグモ 3 幼生、コガタコガネグモ 2 ♀, ヤマゴミグモ 2 幼生、オオトリノフンダマシ 1 ♀, コガネグモダマシ 1 幼生、コガネグモダマシ sp. 1 ♂ (アシナガグモ科) チュウガタシロガネグモ 2 ♀, アシナガグモ 1 幼生 (タナグモ科) クサグモ 1 ♀, コクサグモ 1 ♀ (キシダグモ科) スジブトハシリグモ 1 幼生、イオウイロハシリグモ 1 幼生 (カニグモ科) コハナグモ 1 幼生、トラフカニグモ 1 ♀ (ハエトリグモ科) ネコハエトリ 3 幼生、マミジロハエトリ 1 ♀, 1 ♂, テーニツハエトリ 1 幼生、オオハエトリグモ sp. 1 ♀ (フクログモ科) ヤハズフクログモ 1 幼生、ムナアカフクログモ 1 幼生、イタチグモ 1 ♂。

またこの日の収穫の 1 つに、東京談話会で話題になった背々とした葉を網に付いたハツリグモを 1 個体発見したこと。台風のために背葉が沢山落ちていたことが原因かもしれないが、それでも附近には枯葉の方が何倍も多かった。背葉はマユミかコマユミではないかと思われた。

WANTED (第2回指名手配)

(第2回検査担当 田中穂積)

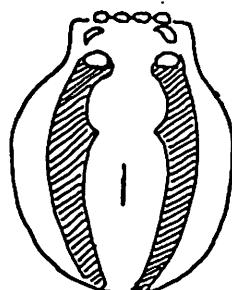
これらのクモにビンと来たら本会検査課へ

第1回指名手配に引き続き、第2回はコモリグモ科のクモ（2種）を選んでみた。これらのクモは第1回と同様、*Japanische Spinnen* (1906) に九州産として記載されているものである。みなさんに発見のご協力を願う。発見された方はぜひ逮捕の上、九州クモの会か東亜クモ学会の方まで身柄を送って下さい。

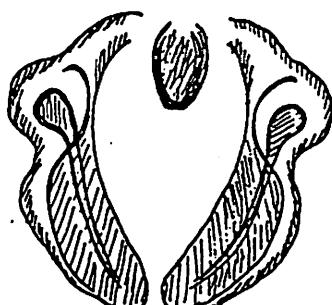
Lycosa lyrivulva

(コンピラコモリグモ)

身長約6mm(女性)。外雌器の形は下記の図の通り。原記載による頭胸部の模様から属は*Pardosa*と推定される。出生地は佐賀県のコンピラ(現在の佐賀市ヤンリュウ金立町?)



頭胸部背面(雌)



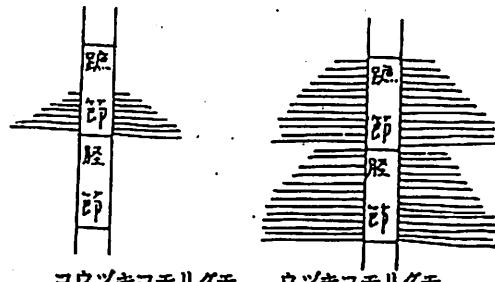
雌・外雌器

Lycosa T-insignita

(コウヅキコモリグモ)

身長約7mm(女性)、5mm(男性)。この種には、外姿や生殖器の構造がよく似た、これまで*Pardosa T-insignita*の偽名を使っていた*Pardosa astrigera*(ウヅキコモリグモ)という種がいるので、注意を要する。両種を見分ける最も簡単な方法は男性の足を見ること(下図)また本種の色彩は淡黄色で一見亜成体のように見えるので、逮捕の際は気をつけたい。両種について詳しく述べて欲しくは Atypus (71), 1978, 12ページを見られたい。属は*Pardosa*。出生地は佐賀県のコンピラとカラツ(現在の唐津市)。

第1脚脛・蹠節の直立毛の様子



Heptathela 2号 の原稿募集案内

1. 会誌投稿規定（下記）を参考にして下さい。
 2. 原稿〆切 6月末日（厳守）
 3. 原稿の送り先

〒861-05 熊本県山鹿市小原

熊本県立教育センター 入江 照雄

全 質 技 繩 著 定

1. 寄稿者は会員に限る。
 2. 原稿の内容は、株形類に関するものなら、解説・記録等なんでもよい。ただし、エッセイ等は著者の了解があれば、「会報」に掲載することもある。
 3. 20×20字原稿用紙に、1マス1字で書くこと。ただし、欧文は2マス3字とする。(少々の訂正は可)
 4. 学名は、赤でアンダーラインを引くこと。
 5. 図は墨入れした上、図中の文字を入れ、そのまま印刷できるようにする。縮少率は図の端に青鉛筆で記入すること。
 6. 原稿は図表を含め、出来上り6頁以内とする。それ以上の長さの原稿については、分載するか、もしくは超過分の費用を個人負担とする。(但し、原稿の集まりが少ないときは、会長、編集幹事の判断のもとで超過を認める場合もある)
 7. 写真版等特殊技術を要する印刷費用は個人負担とする。
 8. 希望があれば、個人負担で別刷を作製します。希望者はその旨を必要部数・表紙の要・不要を明記して原稿に添えて申し出て下さい。

1979, 1980年度九州クモの会役員と同事務局

会長：吉倉 真

編集委員長：入江 照雄

会計：大熊 千代子

監査：木庭 奏

連絡委員：馬場 武彦・別府 義昭・石野田 振夫・甲守 崇・

松山 紘一・下謝名 松栄・田上 重憲・山口 鉄男・

事務局：〒812 福岡市東区箱崎九州大学農学部昆虫学教室内 九州クモの

会（☎092-641-1101 内線4323）

（郵便振替 福岡37343）

去年10月～11月にかけて役員の信任投票を行ないました。皆様の御協力有難うございました。報告が大変おくれましたことをお詫びいたします。

投票結果報告

会員数54名（1978年11月1日現在）、投票数34。返信のなかったもの20。
吉倉（34）、入江（33）、大熊（33）、木庭（34）、山口（33）、甲守（
33）、下謝名（32、棄権1）、石野田（33）、松山（31）、馬場（32）、別
府（33）、田上（32、棄権1）。（）内数字は信任数。

またこのような投票は大きすぎるのでないかという御意見が1通寄せられました。

事務局だより

仲々予定通りに会報の発行ができなくて、申訳ありません。やっと冬眠が終ったと思いたいです。この会報に、皆様もどうかお気軽に投稿をおねがいいたします。送り先は事務局宛です。また6月末〆切の会誌「Heptathela」に原稿が沢山集まることを期待しています。投稿規定を少し(5と6)変更しましたので、御注意下さい。

今年は佐賀での採集会など、会としての行事も予定しています。皆様の御協力、御活躍を期待いたします。

九州クモの会会報 第5号	
印刷日	1979年3月30日
発行日	1979年3月31日
編集者	大熊千代子・馬場武彦
発行者	吉 倉 真
発行所	九州クモの会
印刷所	ふじよし印刷